

アダム・スミスの経済学

尾道市立大学最終講義ノート

佐藤 滋 正

1. 驚きと学問

アダム・スミス（1723～90年）は、生涯に2冊の大著を出版しています。『道徳感情論』（1759年）と『国富論』（1776年）です。その他に、執筆中の原稿や書き溜められた膨大な手稿がありましたが、亡くなる一週間前に、友人に頼んで、一部を除いてすべて焼却してしまいました。スミスが残すことを許した数少ない手稿の中に、1758年以前の執筆と推定される「天文学史」があります。その論文で、スミスは、「学問」と「驚き」との密接な関連についてこう書いています。

人間は、様々なことに驚く。予期せぬ友人の突然の出現に驚き（surprise）、流星や珍しい動植物の不思議に驚き（wonder）、平原の美しさや山の壮大さに驚く（admiration）。こうした「驚き」こそ「学問」の出発点だ、と。そして、さらにこう続けています。

驚きは、しばしば人を茫然自失させ、見慣れてきたものに切れ目や隔たりを生じさせる。それは、場合によっては想像力の全機構を解体させ、精神錯乱や狂乱へと導くことすらある。そのようなとき、人はさまざまな物語を創作することによって、心と身体のバランスを回復しようとするものである。転んだ子供は、つまずいた石を手で打って痛みを和らげようとする。荒天の海の船乗りや日照りに見舞われた農夫は、海や田の神に祈りを捧げる。初期未開の野蛮な人々の「多神教」や数々の「迷信」の起源は、ここに求めることができる。彼らは、自然現象の中に何か超自然的な意思や力の作用を読み取り、それに対して人間的に反応することによって自らを慰めたのだ、と。

「子供は、自分を傷つける石を打つのと同様に、お気に入りの果実を愛撫する。野蛮人の考えもそれとあまり変わらない。……野蛮人は、ある事物がある感情を喚起するという以上には、ある事物がその感情の適切な対象であることの証拠を求めない。……海はネプチューンの機嫌によって凧となって広がったり嵐となって逆巻いたりする。…… そのぶどう

の樹は沢山の葡萄を実らせるだろうか？それはバカスの恵みから出る。……ここに多神教の起源があり、またすべての不規則な自然の出来事を、目に見えないが知的な存在、つまり神・悪魔・魔女・守り神・妖精の好意や不機嫌に帰する俗間の迷信の起源がある。……[しかし] それ自身の本性の必然性によって、火は燃え、水は元気を回復し、重い物体は落下し、軽い実体は上方へ飛ぶのである。そういう事柄にジュピターの見えざる手が作用しているとは、決して理解されなかった。」（「天文学史」29～31頁；HA,pp.48～49）

「不規則な自然の出来事」の一つ一つを、人間の外側にある自然から人間の内側に引き寄せて理解しようとする多神教や迷信とは違って、不思議な自然現象の中に（人間の外側に）あくまでも踏み止まり、自然をそれ自体の本性の必然性に即して人々に読み解いていくのが「学問」だ、こうスミスは述べているのです。そして、そのような学問的態度として、フランスの哲学者R. デカルト（1596～1650年）に先蹤を求めます。デカルトこそ、人と自然の間にはなく、バラバラに立ち現れてくる自然現象それ自体の中に、中間的諸事象の目に見えない結合の鎖を発見しようとした哲学者だ、と考えるからです。

スミスは、デカルトが想定していたこの目に見えない結合の鎖の環を、「ジュピターの見えざる手invisible hand of Jupiter」と呼んだのでした。そして、自然現象と同様に、やはり不思議さに満ちた人間と社会の「出来事」の中に、この「見えざる手」をまさぐっていくのです。

II. 見えざる手と経済人

実際、社会の領域には、「見えざる手」が作用しているとしか言いようのない、不思議な顛末をもつ出来事が充ち満ちています。スミスは、『国富論』のあちこちで、経済現象を結びつけるそのような目に見えない鎖の環を、丹念に掬い上げています。利己心と貪欲に駆られて土地を改良した地主の努力は、地主の意図に反して、多くの人々への生活必需品の平等な分配をもたらしました。腹は目ほどには大きくなく、産み出した農産物をすべて地主が消費し尽くしてしまうことは不可能だったからです。また、重商主義は外国貿易の保護に傾きましたが、外国貿易によって流入した金銀や宝石は地主の消費をプライベートなものに変えてしまい、そのことによって地主のパブリックな信望と貫禄が失墜して封建制の絆がズタズタに切り裂かれてしまいました。重商主義は、他ならぬ重商主義自体によってその存立基盤を没落させてしまったわけです。人間の歴史には、当事者の意図を越えて思わざる結果に立ち至るこのような事例が沢山あります。諸個人の利益と社会全体の利益の関係についても、同じようなことが言えるのではないか。『国富論』の中に一度しか出てこない「見えざる手invisible hand」という言葉を含む次の一文で、スミスはこう述べています。

「実際、一般に、彼〔各個人〕は公的利益を促進させようという意図ももたないし、彼がどれほどそれを促進しているかも知らない。……彼は自分自身の利得のみを意図していながら、見えざる手に導かれて、彼が少しも意図していなかったある目的を促進することになるのである。」（『国富論』II、120頁；WN,p.456）

自分の利益を求めて行動する諸個人の行動が、結果的には社会全体の利益を促進させている、あたかも「見えざる手」に導かれているかのように、とスミスは述べています。しかし、「私的利益 self interest」と「公的利益 public interest」とは、このように調和的に捉えてもよいものなのでしょうか。例えばスミスと同時代人のJ. J. ルソー（1712～78年）は、「土地を囲い込んで『これは俺の土地だ』と最初に宣言した者が最初の市民であった」と述べて、文明の墮落をもたらした私的所有者（市民）を痛切に告発し、「自然状態」への還帰を説きました。私的利益と公的利益を対立的に捉えた政治思想家ルソーに較べると、スミスは、ずいぶん楽観的に見えます。

ちょっと脱線しますが、そして少し変な言い方になりますが、それは、恐らく、スミスが「経済学者」だったからではないでしょうか。スミスの時代の「経済学」は、「ポリティカル・エコノミー」と呼ばれていましたが、これは、「ポリティクス」という「公的」な意味領域の言葉と、「エコノミー」という「私的」な意味領域の言葉が強引にくっつけられた、甚だ坐り心地の良くない言葉なのです。しかしこの言葉は、重商主義的な政治的規制で雁字搦めになっていた18世紀西欧の政治体制を「ポリティカル・エコノミー（政治経済）」と呼ぶことによって、まだ定かでないけれども「ポリティクス」とは区別される今まさに動き出そうとしている新しい時代へのうねり（「エコノミー」）を掴み出そうとする、強烈な学問的意思と結びついたものでした。経済学者スミスがオプティミスティックに見えるのは、“動かないもの”の中に“動くもの”を見いだそうとする、「経済学」という学問のスタンスの、そのような肯定性に関連しているためかもしれません。

さて、悲観的か楽観的かはともかくとして、話を元に戻して、こうしてスミスは、「私的利益」を「公的利益」へと推転させていく不思議な目に見えない鎖の連結環を探り出し記述することに、自らの学問の対象を設定したのでした。その際、利己心をもつ諸個人が、社会を動かす出発点に据えられることとなります。もちろん、社会を動かす原理は、利己心だけに限られるものではありません。「人類の幸福のために」とか「世界平和のために」といった「利他心」もまた、人々の勇気を奮い立たせて社会の集合力を高めていくことは間違いありません。しかし、スミスは、生活の必要に迫られた利己的活動の方が、高邁な理想をもった少数の人々の偉大ではあるが例外的な活動よりも、切羽詰まった必要性に迫られているだけにより大きな努力がひき出される、と考えて、社会の基軸原理に諸個人の「利己心」を据

えたのでした。

「目的の偉大さが、時々、異常な精神力や野心をもつ少数の人々の努力を動かすことを疑うものではない。しかしながら、明らかに、最大の努力をひき起こすために偉大な目的が必要だ、ということでもない。対抗意識と競争心は、取るに足らない職業においてさえそれに秀でることを野心の目的にさせ、しばしば最大限の努力をひき起こさせる。これとは反対に、偉大な目的は、単独で実行の必要性に支えられていないので、ある程度の努力をひき起こすのに十分だ、ということはずまない。」（『国富論』Ⅲ、111頁；WN,pp.759～60）

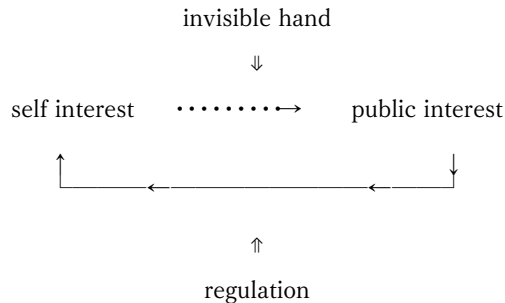
スミスが自らの学問の中心に据えた「利己心」をもった諸個人は、人類の為、国家の為にいった「偉大な目的 great objects」を奉じてそれに殉ずる高潔の士ではない。「あいつには負けないゾ」という「対抗意識 rivalry」や「負け犬にだけはなりたくない」という「競争心 emulation」をもった、「野心 ambition」に満ちたエゴイストたちです。しかし、そのような諸個人の利己的活動が寄り集まってテンションを高めていくと、結果として、社会的富裕というより高次の公的利益を思いがけず促進している。「見えざる手」が働いているとしか言いようがない、事態のこの不思議な進行の中に隠れている連鎖の環を掴み出してみたい。スミスはこう問題を立てたわけです。「経済人 homo economicus」を原理とするスミス「経済学」の生誕です。

しかし、私的利益は公的利益へと転成していくと、本当に考えても良いものなのでしょうか。利己心はその原理になるなどと、確実に言えるのでしょうか。この疑問に対して、スミスは、次の2つの論点を提出して答えています。一つは、「作用原因」と「目的原因」の区別であり、もう一つは、「同感の原理」です。

Ⅲ. 作用原因と目的原因

ここまで述べてきたことから明らかなように、経済学は、私的利益が公的利益に転成していく不思議の道筋を、諸個人の利己心を原理として叙述しようとする学問でした。そしてそのことによって、「経済学」という学問は、他の学問とは違う独自の性格を帯びることになります。法律学や政治学であれば、「国家」という高次の目的があって、それを根拠にして、構成員（諸個人）の「規制 regulation」が論議されることになります。例えば、スミスが大変尊敬していたD. ヒューム（1711～76年）は、「全体の効用への配慮」からの私権の制限に正義の一定の根拠を認めていました。これに対して、経済学のばあいには、全体的な観点からする諸個人への「規制」ではなく、私的利益の追求が社会全体の利益へと繋がっていく「見えざる手」の解明が問題設定されるのです。

簡単な図で、対比的に示してみましょう。経済学の場合には、「私的利益 self interest」から「公的利益 public interest」へとベクトルを左から右に走らせる「見えざる手 invisible hand」に焦点が当てられています。これに対して、例えば法律学や政治学の場合には、ベクトルを右から左に向かわせるいわば“見える手”である「規制regulation」が問題設定されることになります。



この右から左に向って走るベクトルを拒否して、左から右の右向きのベクトルに焦点を当て、それ一本だけで学問を立ち上げていったところに「経済学」が生誕することについては、すでに述べました。しかし、それは、可能なのでしょうか。スミスは、「可能である」と答えますが、その前に、「そう考えるべきだ」という議論を展開します。そこで動員されてくる概念が、「作用原因 efficient cause」と「目的原因 final cause」です。『道徳感情論』の以下の一文で、スミスは、自然界や人間界の“個”と“類”の「感嘆」すべき調整ぶりを例証としながら、「諸手段 means」と「諸目的 ends」の関係について、次のように述べています。

「宇宙のどの部分においても、私たちは諸手段が……諸目的にみごとな技巧で適合させられているのを見る。植物または動物体の機構において、私たちは、いかにすべてのものが自然の二大目的である個体の維持と種の増殖を促進するように工夫されているかに感嘆する。だがこれらにおいて、またすべてのそのような対象において、私たちはやはり、それらのそれぞれの運動と組織の、作用原因と目的原因とを区別する。食物の消化、血液の循環、それからひきだされるさまざまな体液の分泌は、動物の生命の偉大な諸目的のために、すべてが必要な働きである。それでも私たちは、それらを、その作用原因から説明するのであって、決して諸目的からは説明しないのである。」（『道徳感情論』（上）225～26頁；MS,p.87）

牧場を駆け回る馬の元気あふれる躍動は、そのまま、馬という動物種の保存へと繋がって

いく。人体を構成する様々な諸器官が活発に活動すれば、その人の健康は増進する。しかし、個々の馬は“種の保存”を念頭に置いて走り回っているわけではないし、胃腸や心臓が“人体の維持”という高次の目的への意志をもって活動しているはずもない。個としての活動と、総体としての活動は、いわば位相を異にする2つの働きであり、前者を後者の「手段」とみなすわけにはいかない。両者は、それぞれが別個の目的をもった2つの「原因」であり、すなわち「作用原因」と「目的原因」として掴まれるべきものである。こう、スミスは語っています。

スミスが述べている言葉の裏には、動物や人間のような「生命」の活動は、時計のような「機械」の作動と同等視するわけにはいかない、という主張があります。人が製作した機械であれば、それを構成する部品は「目的」でなくて「手段」です。例えば、時計の目的は時を正確に示すことです。つまり、もし針やゼンマイのような部品に不具合が生じたならば、これらの手段はすぐに取り替えられてしまっても構いません。手段は、目的の観点から一方的に規制されるのです。つまり、上の図の右から左に向かう「規制」のベクトルは、観察対象が機械であるような場合の関係表現であることが、これで解ります。

これに対して、馬や人間、さらには人間社会のような生きた活動体の場合には、機械のように考えるわけにはいかない。もちろん、牧場主や工場主にとっての馬や従業員は、牧場経営や工場経営という高次の目的のための手段ですから、左向きのベクトルが是認される面も含まれています。しかし、生命活動は、機械のように＜手段－目的関係＞でなく＜目的－目的関係＞で考えるべきではないか。そもそも牧場主や工場主の経営も、“生命”という神秘的活動領域に潜んでいる隠れた“能力”を成立根拠としているのではないのか。高い次元から諸個人を俯瞰してベクトルを右から左に走らせる機械モデルでなく、スミスは左から右の右向きのベクトルに踏み止まり、目に見えない結合の鎖を掴み出すことによって、目的としての人間社会が胚胎している可能性の領域に分け入ろうとしたのでした。「驚き」に「感嘆」する不思議の経済学者アダム・スミスの眼が、ここには強く光っています。

IV. 同感の原理

では、ベクトルを左から右へと転成させていく「利己心」には、本当にそのような原理的な力があるのでしょうか。そのように主張する根拠はどこに求められるのでしょうか。スミスは、利己心の中に「同感sympathy」という原理を嵌め込むことによって、この疑問に答えます。順を追って説明していきましょう。

まず、スミスは、どんなに「利己的selfish」に見えても、他人への関心を抱くのが人というものだ、と言います。幸せそうな少女の笑顔を見ると自然に頬が緩みこちらの心も晴れやかに becoming。サーカスの高所での綱渡りを見上げるとなんだかお尻のあたりがムズムズ

してくる。別に何の利害関係もない赤の他人に対しても、人はこのように、無意識のうちに相手の立場に身を置き、気にかける生きものなのです。

「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、明らかに彼の本性の中にはいくつかの原理があって、それは彼に、他人の運不運に興味をもたせ、それを見ること以外には何も利益がなくても、他人の幸福を必要と感じさせる原理である。…… 群衆は、ゆるい綱の上の踊り手を見つめているとき、自然に彼ら自身の身体をくねらせねじ曲げバランスをとるのであって、それは彼らが踊り手のするのを見るとおりにしているのだし、自分たちが彼の境遇においてはするに違いないと感じるとおりにしているのである。…… 同感、情動を見ることからよりも、それを掻き立てる境遇を見ることから生じるのである。」（『道徳感情論』（上）23～31頁；MS,pp.7～12）

人間には、「同感」という、「利己心」とともに具わるもう一つの感情がある、と言うのです。しかし、他人に無関心でいられないとはいっても、同感、相手に対する直接的な第一次的感情の発露とは区別されなければなりません。誰でも、雨に濡れた小学生や貧しい身なりのホームレスを見ると可哀想と思うでしょう。しかしそのような感情は一時的で決して持続的なものではありません。すぐに私たちは、小学生やホームレスを冷静に観察して、外出前に親は天気予報を教えなかったんだろうとか、働かずにただ怠けているだけじゃないんだろうとか、あれこれ詮索のチェックを入れます。そして、もし自分が彼や彼女だったらどうするかを、想像し判定します。同感、いわば一歩退いた、クールなジャッジを伴う感情なのです。夏目漱石が『三四郎』の中で、「哀れみ pity」と「愛 love」は似ているけれども違うと言っていますが、「同感」は「同情」や「哀れみ」とは違って、「利己心」を持つという点で「境遇 situation」を共にする自立した他人への共感なのです。

このような同感が、社会の形成原理になりうることは、容易に了解できるでしょう。誰もが胸中に「公平な観察者」「胸中の第三者」を宿しており、常に自他を厳しくジャッジして、利己心ある自立的な諸個人として法（社会）を形成していくからです。こうして、「私的利益」は「公的利益」へと結びついていくこととなります。スミスが、左から右へのベクトルにあくまで踏み止まって考えようとした根拠は、ここに求めることができます。

V. 商業社会

では、利己心をもった諸個人は、現実にはどのようにして社会形成を遂げていくのでしょうか。スミスは、利己心をもった諸個人が活動する「商業社会 commercial society」が成立してくる実際の道筋について、以下のように語ります。ここで商業社会とは、すべての人が

商人であり、自分が所持する財貨を他人が所持する財貨と交換するという、商品関係が仲立ちとなって人々を結合させているような社会です。少し長文ですが、これまでの『道徳感情論』の議論を踏まえて、『国富論』の生き生きとした筆を味わってみて下さい。

「動物は、人間または他の動物の何かを獲得したいばあい、そのサービスを必要とする者の好意を獲得する以外には、どのような説得方法もちあわせてはいない。子犬は母犬にじゃれつき、スパニエルは夕食中の主人の注意を引くために沢山の芸をして主人からのご馳走にありつこうとする。……ところが人は、常に同胞の助けを必要としていながら、しかもそれを彼らの慈悲心だけに期待しても無駄である。……他人にある種の取り引きを申し出る人は、誰でも次のようなことをしようと提案するものである。私の欲しいそれをください、そうすればあなたの欲しいこれをあげましょう、というのがそのような申し出のあらゆるばあいの意味なのであって、そういう方法で私たちは、自分たちが必要とする善行の圧倒的大部分をお互いに獲得し合うのである。私たちが自分たちの夕食を期待するのは、肉屋や酒屋やパン屋の慈悲心からではなくて、彼ら自身の利害への彼らの関心からである。私たちが呼びかけるのは、彼らの人類愛ではなくて、彼らの自愛心にであり、しかも彼らに私たち自身の必要を語るのではなくて、彼らの利益を語るのである。主として市民同友たちの慈悲心には、乞食以外には誰も頼ろうとはしない。否、乞食でさえ、それに完全に頼ろうなどとはしない。」（『国富論』 I、25～26頁；WN,pp.26～27）

商業社会の中で、諸個人は、子犬や乞食のように、他人の利他心（「好意 favour」「慈悲心 benevolence」「人類愛 humanity」）に期待するのではなく、相手の「自愛心 self-love」に訴えかけることによって必要な「助力 help」や「善行 good offices」を獲得しようとする、とスミスは書いています。すでに述べた「同感の原理」が「利己心」と一体となって、しかし自分のでなく相手の「利己心」と絡めて展開されているのを、読み取ることができるでしょう。Xを所持するAは、Bが所持するYを獲得するためには、「Xをさしあげましょう。Yを下さい。そうすることはあなたの利益になりますよ」と申し出る、と。このばあい、諸個人は、自分自身の利己心について語るのではなく、相手の利己心に向かって語りかけています。自分自身の利己心を隠す必要はありませんが、とはいえそれは、相手の利己心が応えてくれなければまったく無力で無意味なものです。すべての個人が、相手の利己心に向かって訴えかけ、訴えることが自分の利己心の表明にもなっているのです。そうして、お互いに投げかけ合う言葉の矢がクロスする場に立ち上がってくるのが、「商業社会」なのです。ここには、「利己心」を持つという同じ「境遇」に「同感」し合う諸個人によって、「私的利益」が「公的利益」へと編み上げられていく「見えざる手」の立体的な姿が、ダイ

ナミックに描き出されています。私たちがしばしば「市場」と呼ぶ「商業社会」を、スミスは「見えざる手」のこのような機制として掴み出したのでした。

VI. 学問と驚き

再び、「天文学史」に戻りましょう。スミスは、哲学者（学者）は音楽家に似ていると言います。すぐれた音楽家の耳には、リズムとハーモニーのどんなにわずかな不足でも聞き分けられてしまいます。学者もまた、大半の人の目には緊密に結合しているように見える平板な事象の中に断絶を看取って、そこに「ジュピターの見えざる手」を設定して言葉の橋を架ける存在だ、と言うのです。確かに、超絶技巧のバイオリニストの演奏は音と音の間の深淵をまざまざと私たちの耳に開示してくれますし、詩人の天才には言葉が潜めている可能性に目を瞠らせられます。学者の著作や発言もまた、日常生活の裂け目への気づきを人々に与えるようなものでありたいものです。

他方、スミスはまた、「天文学史」を、人々の世界（宇宙）観が天動説から地動説へと変化してきた歴史であるとともに、それだけでなく、人々の美的感覚に訴えかけようとする説明の変化の歴史としても記述しています。学問は、人々が理解し満足できる言葉で語られなければならない、その点では、学問の言葉は機械に似ている、最初のものほど複雑で、後に行くほど次第に単純で力強くなっていくからだ、とスミスは言います。そしてニュートン（1643～1727年）の体系こそは、その実例である、そのシンプルな説明を通して人々の美意識そのものを変化させ、今日では誰もが客観的「真理」とさえみなすに至っているほどだからである、とも言います。

「私たちは、すべての哲学体系を、そうでなければバラバラで不調和な自然現象を結合するための単なる想像力の考案物として表現しようと努力してきた。だがそんな私たちでさえ、知らず知らずのうちに引き込まれて、この[ニュートン]体系の結合諸原理を表している言葉を、まるでそれらの原理が、自然がそのいくつかの作用を連結するのに使用している真の鎖であるかのように使ってきた。したがって、その体系が人類の一般的で完全な是認を獲得したということ、そしていまや想像上で天空の現象を結合する一つの企てとしてでなく、人によってかつてなされた最も偉大な発見、すなわち、私たちが日々その現実性を経験している一つの主要な事実によってすべてが密接に結合されている、最も重要で最も崇高な諸真理の広大な鎖の発見とみなされていることは、それほど驚くにはあたらない。」（「天文学史」103頁；HA,p.105）

スミスは一面では、社会観察におけるニュートンたろうとしていたのかも知れません。ス

ミスが採用した原理は、「利他心」のような夥しい意味づけを抱え込む概念装置ではなく、誰にとっても素直に肯定しうる「利己心」です。この「利己心」と「同感」という、一見対立的に見える二つの原理を、「利己心」をもつ他人への「同感」という形式を媒介にして、スミスは私たちの眼前に生き生きと「商業社会」として浮かび上がらせて見せてくれました。その手法は、スミスが「最も重要で最も崇高な諸真理の広大な鎖の発見」と激賞した万有引力の法則に似て、「自然」でシンプルで、強い説得力をもつものです。今日では私たちは、ごく自然に、スミスの“市場”を、あたかも客観的に実在する「真理」であるかのように語っているほどです。

しかし他面でスミスは、「学問」とは、「驚き」が察知した現象の裂け目に向かって学者が投げかけた「単なる想像力の考案物 mere inventions of the imagination」でしかない、とも述べています。精神の裂け目を癒す一つの「企て」（物語）であるという点では、学問と神話に、どれほどの違いがあると言えましょうか。両者の距離は、実はそれほど遠くはない。神話と同様に学問にとっても、星空や名曲や人の優しさに思いがけなく接した時の驚きこそ出発点であり、肝腎なことは、言葉では語りえない「ただ驚くのみ」という絶対的な素心の刹那に実際にどれだけ出会えるかだ、ということは確かだからです。

とはいえ人は、そのような言葉にならないような出来事を前にした場合にも、なおかつ言葉をもって説明しないではおれない生きものでもある。そして、自分を感動させた物事を見つめ観察して、その不思議の仕組みを他の人に伝えようとして想像力をめぐらせる。スミスは、そのような「人間の学問」に、深く思いを致した「経済学者」でありました。

【後記】

本稿は、2001年に尾道短期大学が四年制に改組するに際して刊行された論文集『現代知のネットワーク』（溪水社、2001年）に掲載した拙稿「アダム・スミスの『見えざる手』の思想」に、その後の研究を踏まえて加筆したものである。引用したスミスの著作は、①「天文学史」（只腰親和訳『アダム・スミス哲学論文集』名古屋大学出版会、1993年所収）、②『道徳感情論』（水田洋訳、岩波文庫（上）（下）、2003年）、③『国富論』I～III（大河内一男監訳、中公文庫、1978年）を使ったが、グラスゴウ大学版『スミス全集』（*The Glasgow Edition of The Works and Correspondence of Adam Smith*, Oxford UP, 1976, 1978, 1980）も参考にして、訳文に多少の手を入れた。引用に際しては、タイトルと頁、および原典頁を、（「天文学史」×××頁；HA,p.×××）（『道徳感情論』×××頁；MS,p.×××）（『国富論』×××頁；WN,p.×××）のように、簡略化して本文中に挿入して示した。尚、文中の傍点および〔 〕は、すべて筆者のものである。